



こもれび

KOMOREBI

MIYAGI UNIVERSITY OF
EDUCATION LIBRARY NEWS

No.125

2014.3.11 発行



特集

震災から3年 ～震災関連資料の今～

CONTENTS

- 02 図書館インフォメーション
 - 04 特集 震災から3年
 - 06 私と本
 - 08 子ムエの本棚
 - 12 歴史のなかの教科書
 - 14 学生の読書室
 - 16 宮教大図書館の裏話
- 平成26年度図書館開館カレンダー



卒業される皆さんへ

ご卒業おめでとうございます!

宮城教育大学での学生生活はいかがでしたか。図書館に何度も足を運んでいたのであれば、嬉しく思います。卒業される皆さんへ、図書館からの最後のお願いです。図書館から借りた資料は必ず在学中にご返却ください。

卒業後も図書館を利用してください

この3月で卒業します、というあなた! 卒業後も宮教大の図書館が利用できます。

卒業後に図書館へ来館した時はまず、カウンターで受付をしてください。学生時代のように資料を借りたい場合には、利用登録が必要になります。住所が確認できる身分証明書を持ってきてください。「図書館利用証」を発行します。

貸出冊数は5冊まで、貸出期間は2週間となります。在学中の条件と違うので、ご注意ください。

詳しくは、カウンターでお尋ねください。



新入生の皆さんへ

ご入学おめでとうございます

これからの学生生活に、図書館を大いに活用してください。まずは、図書館の見学からはじめてみませんか。

図書館ツアー

- 4月4日、7日、8日
- 各日12:30~12:50、15:40~16:00
- 図書館ツアーに参加し、その日に本を借りた方、各日先着30名にプレゼントがあります。



図書館教養講座 実施しました。

図書館では、誰でも参加でき、大学生としての教養に加えて、将来の社会人としての教養を身につけることのできる講座を年に10回程度開催しています。宮教大の先生はもちろん、留学生や学外の方を講師としてお招きすることもあります。「この人にこれを聞きたい!」などご要望がありましたら、図書館カウンターまでお気軽にどうぞ。

今年度後期の図書館教養講座は以下の通り実施しました。講座とリンクさせた図書館入口のミニ展示の資料も好評でした。平成26年度は、「スパイラル・セッション」として、さらにパワーアップしてお届けする予定です。

8月1日(木) 第3回「ビブリオバトル@宮教オープンキャンパス 2013」

10月9日(水) 第4回「Japan Knowledgeを活用したレポートの書き方講座」

10月23日(水) 第5回「本の魅力をポップで伝えよう」9月末の選書会と連続企画

11月27日(水) 第6回「絵本の読み聞かせ実践講座」

12月5日(木) 第7回「クリスマスカードワークショップ」

1月16日(木) 第8回「海外を知ろう3:台湾のさまざま」

1月31日(金) 第9回「好感度アップのためのSNSのお作法」



図書館ボランティア MUES 募集中です。

図書館で主催する「スパイラル・セッション」の企画・運営、この『こもれば』の記者、館内業務のお手伝いなど、興味がある方は是非、図書館カウンターにお声掛けください。



図書館システムが新しくなり、より検索が便利に!

附属図書館のシステムがこの2月から新しくなりました。蔵書検索システム(OPAC)も新しくなり、検索した資料の写真が表示され、さらにイメージしやすくなりました。検索結果の絞込み機能が充実しました。



iPadの貸出を始めました。

閲覧席で勉強しながらのちょっとした情報検索に、iPadをご利用ください。貸出を行っています(館内での利用限定)。ご希望の方は、図書館カウンターまで。

宮城教育大学機関リポジトリを公開しました!



平成25年9月に宮城教育大学機関リポジトリを公開しました。機関リポジトリとは、大学の学術成果物(先生が書いた論文など)をインターネット上で無償公開するシステムで、世界中の多くの学術機関で運用されています。宮城教育大学機関リポジトリでは、現在、宮城教育大学紀要の40巻(2005年)から最新号掲載論文を閲覧・ダウンロードすることができます。公開を開始した9月から1月末までの5ヶ月間で、すでに7,865件がダウンロードされています。皆さんもぜひご利用ください。URL: <https://mue.repo.nii.ac.jp/> ※図書館のホームページからもリンクがあります。



「歴史のなかの教科書～高度経済成長期の教育～」を開催しました。

附属図書館の夏の恒例企画である、「歴史のなかの教科書展」を開催しました。平成25年7月31日～8月8日までの間、附属図書館1F展示ホールで昭和20年代から40年代の小学校教科書を展示し、654名の方が来場しました。今回は教科書を展示ケースの中に展示するだけでなく、手に取って中を見ることができる教科書も多数展示しました。また、高度経済成長期という時代をより具体的にイメージできるように、解説パネルや関連書籍の展示、さらには当時の宮城県や仙台市の映像も上映しました。



最終日には、学校教育講座笠間賢二教授と元数学教育講座萬仲介名誉教授による記念講演「高度経済成長期の教育:団塊の世代が子どもだったころ」を開催しました。平成25年12月12日～16日までの間、角田市教育委員会と角田市図書館との共催で、同じ内容の展示を角田駅(角田オークプラザ)でも開催し、15日には記念講演も同じく開催しました。

Coming soon

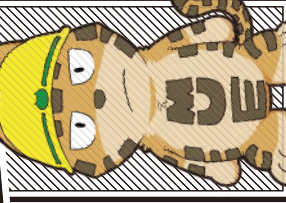


多目的閲覧室が、模擬授業やグループ学習に最適な「スパイラル・ラボ」として生まれ変わります。いつも多くの学生で賑わっている教科書コーナーには、利用しやすいように大きな机や教材作成コーナーを用意します。絵本コーナーは眺めのよい窓側に引っ越して、読み聞かせの実践練習等もできるようにしました。次号で特集し、詳しくお伝えする予定です。乞う、ご期待!



震災から3年

震災関連資料の今



こもれび No.125



平成23年3月11日14時46分に起きた東日本大震災は、皆さんの記憶にもまだ鮮明に残っていると想います。あの日を境に、この震災の体験記や津波のメカニズム解説、原子力発電所の問題、自衛隊の活躍、防災マニュアルなど、様々な話題で資料が刊行されました。巨大な地震であったため、各団体から資料を作成することができたこと、経験した人数が大変多いことにより、資料の種類も週刊誌や新聞記事のまとめ、専門書や手記といった種々のスタイルがあります。

東日本大震災から3年経った今、これらの資料を見たい方はどうしたらよいでしょうか。地震直後に発売された週刊誌や新聞は、現在どこの本屋に行っても手に取ることはできません。震災関連の資料がどこどこのように保存・公開されているのかについて、図書館ボランティアMUESの皆さんが取材しました。

(附属図書館)

宮城教育大学附属図書館の「震災・防災資料コーナー」

当館は平成21年3月に前震工事を終了したばかりで、地震による建物への被害は最小限に食い止められました。それでも一部の書棚が

倒れ、本が10万冊以上墜下するなどの被害がありました。数多くの宮城大の学生・教職員がボランティアとして復旧作業への協力をしてくれました。そのおかげで平成23年5月9日には部分的ではありますが、開館することができました。

その後、続々と出版される東日本大震災に関する資料の収集をはじめましたが、非常に品数が多いため、主に本学の教育・研究に関連する図書を対象として収集する方針を定めました。附属図書館の1F奥へ参考図書コーナーの隣に「震災・防災資料コーナー」を設置しています。現在では購入、



寄贈あわせて約400冊ほど(1月末現在)のコレクションになっています。この資料は、手に取って読むことができ、通常の図書と同じように借りることができます。

宮城教育大学教育復興支援センター

被災地の学校支援のために設置された「宮城教育大学教育復興支援センター」でも積極的に震災関連の資料を収集しています。購入した書籍等の資料に



管理棟の隣にあります

例えば支援先の各学校からの報告書、本学で発行した震災関連の報告書などが一ヶ所に集まっているので、ボランティア活動や研究等のための利用に便利です。

収集している本は主に震災関連資料や心のケア、学生ボランティアに関するものですが、この他に支援先の学校で使われている教科書や指導書も備えているのが、教育大学である本学ならではの特徴です。

被災地の学校図書館では本学の学生がボランティアを行ないました。全国から

寄贈された本や、また学校同士が統合されて増えた本を仕分けする、という作業を支援するためにセンターからボランティアを派遣しました。

- 主な派遺先と作業内容は次のとおりです。
- ①気仙沼市立洋高等学校 6,7000冊の寄贈本整理
 - ②東松島市の小・中学校の学校図書館 10万冊の本の整理
 - ③石巻市立北上小学校 7000冊の蔵書整理
- 本学の学生はこれらの活動によって単位を取得することは出来ませんが、各種

専門家の指示を受けて活動するうちに、被災地の復興支援の必要性への強い意識が芽生えているようです。

センターには、学生ボランティアが活動する際に打ち合わせ等が出来る図書があり、震災に関する資料は主にそこに置かれています。附属図書館のOPACで資料検索をした時に、所在が「教育復興支援センター」と書かれているものは、この部屋を利用することができます。また、近隣の小・中学校の図書が震災・防災の学習に使用できるように開放されているそうです。

上述の活動内容も含め、教育復興支援センターは



震災・防災関連の書籍を所蔵しています

「復興支援に携わる人々の情報センター」「学生ボランティアの活動の支援拠点」として「研究者による支援方法の構築の場」を主な柱として広く門戸を開いているので、ぜひ活動に役立ててほしいとのことでした。

国立国会図書館東日本大震災アーカイブ(ひなぎく)

国立国会図書館と総務省は、東日本大震災に関するデジタルデータを検索し、活用できるポータルサイトを「国立国会図書館東日本大震災アーカイブ」(愛称: ひなぎく)を平成23年3月7日に公開しました。愛称の「ひなぎく」には「Hybrid Infrastructure for National Archive of the Great East Japan Earthquake and Innovative Knowledge Utilization」の頭文字とひなぎくの花言葉である「未来」「希望」「あなたと同じ気持ちです」といった意味

が込められています。ここでは、東日本大震災に関するあらゆる記録・教訓を、次の世代やよりの多くの人々に伝え、被災地の復旧・復興事業、今後の防災・減災対策に役立てるために、震災に関連する音声・動画・写真・ウェブ情報等を包括的に検索できます。NHKによる「NHK東日本大震災アーカイブ」や河合新報の「震災アーカイブ」Yahoo!Japanの「東日本大震災写真保存プロジェクト」Google 日本法人の「未来へのキオク」米ハ

バド大学の「2011年東日本大震災デジタルアーカイブ」など、企業や大学などが制作した資料や国立国会図書館が所蔵している多くの資料が検索対象です。震災前の風景、震災直後の様子、そして現在の復興に向けての取り組みの様子や、タイムライン検索・地図検索等を利用して、条件を絞り込んで検索することが出来ます。また、東日本大震災についての資料だけではなく、阪神淡路大震災や関東大震災についての資料も含まれています。音声・

動画資料では、復興に向けたイベントの様子や、震災・原発事故関連のニュース、震災を直接体験した人々の生の声を、音声と動画で見と聴くことができます。

テレビや新聞などのメディアだけではなく、震災関連の情報がたくさん収録されているので、このサイトを見て、新しい発見をすることができました。震災についてネットで簡単に詳

しく知るよがができるのでおすすめです。(図書館ボランティア/初等教育教員養成課程教育心理学コース 菅原優奈)



国立国会図書館ウェブサイトより

宮城県図書館



宮城県図書館では、東日本大震災後、震災の関連資料を収集しています。その蔵書は現在、図書約2200冊、雑誌約850冊に及びます。特徴的なことは、

震災直後に被災地で配られたチラシや、掲示された手書きポスターなども保管されている点です。今回、震災文庫整備チームに所属する田中亮さんにお話を聞くことが出来ました。

震災後、ゼロからスタートした震災文庫整備チームは、現在5人で活動しています。田中さんの主な仕事は資料の収集で、図書館の中で待っているだけでは手に入らない資料を求め



手書きのメッセージ

て、日々被災地各地に足を運んでいます。出版社から発売されているものばかりではなく、自費出版のものや一冊しかないもの、チラシ等を集めるために、県内各地を回っているそうです。校長会や商工会合会など、様々な機関にも自ら交渉し、出てくる資料の提供を求めているとのことでした。そのような活動の成果として、県内の学校や病院、ボランティア団体の記

録録や、自衛隊関係の写真など、震災を知る上で重要な資料が数多く宮城県図書館に保管されています。

田中さんのように資料集めに熱意を注ぎ、震災の記憶を記録に留めようとしている方がいることに非常に驚きました。復興商店街を訪れると、地元の方々が語る被災体験を長時間に渡って聞くこともしばしば、何度泣きながら帰ってきたか分からないとのことでした。その人々の思いを残して伝えなくては、という強い思いが田中さんを突き動かしているそうです。お話を伺っていて感じました。「震災に関する資料なら『宮城県図書館』とより多くの方々に知られるようにしたい」と田中さんの言葉にも熱がこもります。これからも展覧強き資料収集を続けることが、復興を支える一つの柱になっていくのだろうと感じました。

（図書館ボランティア／中等教育教員養成課程 社会科学教育専攻 移川麗恵）

東日本大震災からまもなく3年が経とうとしています。人々の記憶も、私自

身の記憶も風化し始めているなかで、今回の体験は非常に印象深いものとなりました。

宮城県図書館が、本や雑誌、さらにはチラシやポスター、手書きの資料まで収集し保存しているというところに驚きました。当時作られたものから現在発行されているものまで、様々な資料を個人のチームで集め管理しています。その中で専任の方は2人だけということでは、仕事は忙しいようです。資料は高麗もありますが、図書館の方が探しに行くことも多いとのこと。その場合、様々な自治体、団体に協力を依頼して集めていると聞いて、図書館の努力だけではなく、各団体の協力が必要不可欠だと感じました。宮城県全体で、震災の記憶を形あるものとして後世に残すという考えがないと、成し遂げることができない事業だと思います。

一番心に残っているのは、今回お話を聞かせていただいた田中さんの「震災の資料というのは辛い内容



田中亮さん(右)

が多い。しかし非常にやりがいを感じている」との言葉です。田中さんは震災文庫の資料収集の企画の打診をうけた時、「二つ返事で了承されました。はじめは何もない中からのスタートでしたが、多くの人の協力でここまで来ることができました。『題い形として残していく』田中さんの名刺にも記されている「記憶を記録に未来へ」という言葉の通り震災によって人々が抱いた想いを、資料の保存という形で守っていく田中さんたちの仕事は、本当に素晴らしいものだと感じました。

（図書館ボランティア／中等教育教員養成課程 社会科学教育専攻 横山奈緒子）
取材日1月12日

仙台市民図書館 3・11震災文庫

3・11震災文庫 (仙台市民図書館)

仙台市民図書館には、東日本大震災に関する資料を集めた「3・11震災文庫」があります。東日本大震災の記憶を後世に伝え、復興や生活再建を支援することを目的として設置されました。平成28年5月から資料の収集・保存を始め、平成31年度末まで2823点の資料



があります。資料の中には東日本大震災に関する図書や写真集をはじめとして、団体や個人から寄贈された体験記や報告書などもあります。また、東日本大震災が発生する前後の航空写真や震災発生から約1年分の新聞なども保存されています。「3・11震災文庫」に収める震災に関する資料は日々増加しているのですが、この開架スペースだけでなく地下書庫にも数多く保管されています。東日本大震災について様々な視点から述べられた図書や、震災時の被災地の様子について詳しく知る事ができる資料があり、震災について数多くの情報を得ることが出来ます。東日本大震災が発生してから3年が経とうとして、今でも東北は復興の途上です。「3・11震災文庫」は東日本大震災の教訓や復興の歩みを後世に伝えていくための重要なものだと改めて感じました。

3がつ11にちをわすれないためにセンター (せんだいメディアテーク)

「3がつ11にちをわすれないためにセンター」(通称:「わすれん」)以上センター)は生涯学習施設であるせんだいメディアテークに平成28年5月3日に開設されました。センターでは市民が記録した東日本大震災の写真・映像などを「震災の記録」市民協働アーカイブとして保存する活動が行われています。市民の方々に以外にアーティスト、映画監督など約170名が参加して、これまで映像6509件、写真37536枚、音声18件の記録が寄せられており、また被災地での定点観測写真も集められています。センターには、ビデオカメラなどの機材が用意され、編集作業が可能であるスタジオと、震災体験を語るエピソード番組を配信する放送室があり、市民が情報を発信するためのプラットフォームとして活用されています。センターのウェブサイトでは、震災時に人々が記録した映像や写真を、記録した人の気持ちや表情とともに日本



センターの活動報告



DVD化された映像作品

語や英語で公開しています。また、小中学校の総合的な学習の時間ではセンターの映像が使われたりしています。震災から1年後にはセンター参加者が制作した映像を上映し、活動を紹介する「震災と路」が開催され、のちにDVD化されました。

2年後には「せんだいメディアテークみんなの収穫祭」が行われました。これは、2019年度に新たに記録された映像を上映するものです。3年後の今年も3月に新たな映像の上映会を行う予定です。「3がつ11にち」のことを風化させず、後世へ残していくために参加者が様々な活動に取り組んでいます。

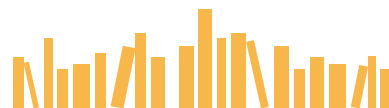
取材をしてみて、東日本大震災の記憶を後世に残していくことの大切さを改めて感じました。「3・11震災文庫」と「3がつ11にちをわすれないためにセンター」は、東日本大震災を経験した人もしなかった人も、震災のときの記憶を思い出し、教訓を学んだりすることが出来る貴重なものです。今回取材をして、3・11の震災のことを残しておくために活動している方々の熱い思いを知ることができ、私も震災のときのことを忘れないでいこうと強く思いました。

（図書館ボランティア／初等教育教員養成課程 教育心理学コース 櫻庭真由）
取材日1月17日

私と本

Book Talk

本学教員・職員の方々の
本との付き合い方をご紹介します



数学教育講座
准教授

佐藤 得志

数学の本(?)

昨年4月に赴任して以来、特に授業との関係で、今年度は主に“3冊の数学の本”と関わってきました。

1冊目は、4年生の卒業研究のセミナーで用いたテキストで、測度論とルベーグ積分論のかなり本格的な入門書です。4年生のセミナーの一つの大きな目的は、学生に数学の本の読み方を教えることです。分かりにくい表現かもしれませんが、書かれている(数学的な)内容をきちんと理解するためには、(何も書かれていないはずの)行間を注意深く読むことが大切です。学生達は、セミナーの回数を重ねるに連れてこのことを徐々に理解していき、セミナーの発表も段々うまくなくなりました。セミナーを通じて改めて思ったのですが、この本は少々難しいですが、とても良い本です。

2冊目は、2年生の集合論、位相空間論の授業で用いた本です。この本は、初学者のための比較的良好な入門書であると思います。しかし、整列集合のところなどは、そのまま読んでも証明になっているとは言い難い部分が含まれていて、初学者には多分理解できないと思います。授業時数の都合で、この部分の証明を書き直した資料を作ったのですが、大変苦労しました。また、著者との専門分野の違いによる感覚の違いなのかもしれませんが、距離空間に関する事柄で、私が重要

と思うことでも抜け落ちていたり、意外に感じました。

3冊目は、3年生の確率論・統計学の授業で用いた教科書です。私はこの分野についてきちんと勉強しなかったもので、これを勉強しながら授業の準備を進めていきました。このテキストでは、測度論に基づいた確率空間を定義してはいるのですが、考える事象の前提となる確率空間が明記されていない箇所が多々あります。また、未定義の概念を用いて議論している箇所もあり、数学的にはかなり乱暴な本です。そのため、テキストの記述を(数学的に)理解するために大変な労力を要することとなり、この授業の準備はとんでもなく大変です(本稿執筆中、現在進行形)。私見ですが、この著者は(測度論を含めた)数学というものを理解していないのではないかと思います。冒頭で“3冊の数学の本”と書きましたが、この本は“数学の本”から外しておいた方がいいかもしれません。



3冊の数学の本

このままじゃ窒息…!?
だれかハサミでカットして…!



特別支援教育講座
教授

長尾 博

挟む文化との出会い

年末、私はソウルにいた。日韓の「視覚障害教師の会」の第1回親善セミナー参加のためである。韓国は2007年より急速に公務員に占める障害者の率を高める政策に入り、最近では障害者別枠試験により全体に占める障害者合格率6%を目指しているという。そのためか、韓国の視覚障害者教師たちは日本側代表団に比べ圧倒的に若かった。会場となった国立中央図書館には障害者支援室があり、「点訳本やデージー本のダウンロードサービス」など日本と遜色のない障害者向けサービスが整っていた。ただ、手で触れる図入りの点字本の製作といった「図を触る文化」についてはあまり資料もなく、これからのようであった。

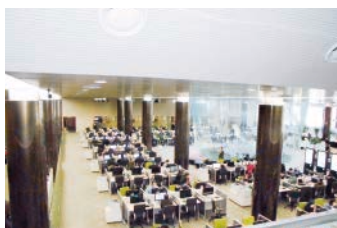
さて、セミナー第1日目を終え、韓国の関係者と食事をともにした。まずは韓国焼き肉、長い肉のままテーブルにある。日本でもよく知られているようにハサミで切って焼くのである。隣席の韓国人に尋ねてみた。「長いま焼いて食べる

人は韓国にいるのですか?」、「いない」という。全盲者への自立活動でもあるまいし、それなら最初から切っておいてくれ!といたくなる。翌日の昼食は誘われての冷麺専門店となった。かなり細い麺である。あの重い韓国のお箸を手に私は麺をすすりはじめた。口に入る分は噛み砕こうとするのだが、これがなかなか切れない。しかたなく再度すすりこみ、麺の切れ端を探す。だが、麺はまだ続くのである。すすってもすすっても麺の切れ端がない。思わず窒息しそうになった。そして気づいた。ハサミがまたしてもテーブルにあるのだ。韓国では、器の中にハサミを入れ、すする前にバチバチと切るようである。それなら、なぜこのような殺人的に長い麺をこしらえる?こんなに長い麺をつくる方が麺職人もたいへんだろうに…。こうして、気づいたのである。これはもう文化である。「ハサミの文化」、「挟む文化」なのである。そういえば、その夜、地下鉄を降りる時のことだった。停車時間の短い韓国の地下鉄のドアは、ものすごい勢いで私の白い杖を挟みにきたのである。



梅にムツボシくん

●「ムツボシくんの点字の部屋」を主催:
<http://nagao.miyakyo-u.ac.jp/>



ソウルの国立中央図書館障害者支援室、朝鮮語版 PC 画面読み上げソフトがちゃんとあった。

少年期は終わらない

「趣味は?」と問われると、他に思い当たることもなく、とりあえず「読書」と答えています。とは言え、誰もが知っているような有名な作品はあまり読んだことがなく、その時々興味関心にあわせて様々な本を手にとってきたというのが実情です。推理小説や恋愛物、歴史にSF、エッセイやノンフィクション、自己啓発の本などなど。それはきっと父の影響だったと思っています。日なたに座って熱心に本を読んでいる父の姿をよく目にしていたからです。

本を読むようになったのは中学生からです。当時、某出版社が展開した、映画と小説をタイアップさせた宣伝に乗せられたこともあり、関連する作家の作品を中心にひたすら読んでその世界に浸っていました。今にして思えば、単に勉強からの逃避行動だったのでしょう。

やや遅いかもしれませんが、アーサー・C・クラークとの出会いは、大学卒業後のことだったと思います。「十分に発達した科

学技術は、魔法と見分けがつかない。」という言葉を残したSF作家です。この時も映画がきっかけでした。SF映画の傑作の一つである『2001年宇宙の旅』の内容があまり理解できなかったことが、同名小説をはじめとするクラークの作品群との出会いとなりました。宇宙の広がりや科学技術の進歩、そして人類の進化の可能性をテーマにした数々の作品が、壮大な世界に導いてくれたものです。

その流れで、今さらながらヴェルヌやウエルズらの作品を手にとることがありますが、100年以上前に考えられたものとは思えない新鮮な世界がそこにはあります。昔のように、その世界にどっぷりと浸る体験は、いつまでも積み重ねていきたいものだと思います。もしかすると、難しい顔をしているように見えた日なたの父も、同じような思いをしていたのかもしれない。

図書館に寄せて

去年の4月に宮教に赴任し、まず行ったのが図書館だった。明るく、小綺麗な雰囲気、落ち着いた空気が流れている。案内や飾り付けが丁寧に施され、学生選書の展示などの企画コーナーも充実している。宮教は四季を通じてキャンパスが豊かな自然に包まれている。移りゆく四季を眺めながら読書なんて、学生のみならず、いいなあ、などと思いながら僕もついでに若返った気分になった。

14年ぶりに仙台で生活を始めて懐かしく思い出すのは学生時代のことだ。僕も学生時代を仙台で過ごしたからだ。ネットも携帯もない時代、テレビはあったがビデオデッキは持っておらず、あまり映画も観られなかった。知的世界の入口としても、娯楽としても、本が担う役割は今よりずっと大きかった。当時、一番町に丸善があり、珍しい洋書が並んでいて、また片平に向かう通りには今よりも古本屋が並んでいた。そんな街の書店や古本屋にはよく行った。

とりわけお世話になったのは大学の図書館だった。全集や著作集など珍しい本は図書館から借りて読んだ。エッセイが好きで読んだ仏文学者の渡辺一夫著作集もそのうちのひとつ。大江健

三郎の先生だと知ったのはずいぶん後のこと。本学の図書館の開架にも並んでいるのを見つけた。十数年ぶりの出会いにちょっと嬉しくなった。

図書館で思い浮かぶのは書庫の風景である。僕の通っていた大学では、書庫が地下にあり、大学院生しか入ることができなかった。大学院生になった僕はさっそくその書庫に入ってみた。すると、整然と並べられた高い書架にぎっしりと本が詰まっていて、いくつものそんな書架の列がずっと向こうまで延々と延びている、そんな空間が目前にあった。ひっそりとした空間だが、人を高揚させる知的エネルギーのようなものが充満していて、厳かささえ感じさせられた。

本学の図書館にはすでにかなり愛着を持っている。そんな親しみやすさに宮教らしさが感じられて嬉しい。図書館の方々の並々ならぬ尽力のおかげだと思う。どうかこれからもよろしく願いいたします。



初夏の9号館付近



教職大学院
准教授

齋藤 亘弘



英語教育講座
准教授

竹森 徹士

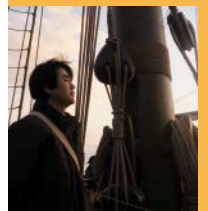
ライブラリアン

大学院終盤の2009年、私はアメリカの大学に研究留学し、フィールド調査をしながら、博士論文を仕上げなければならない重圧と焦燥を感じていました。しかし、研究室は殺風景で、やる気が起きず、かわりに行きつけのカフェで覚醒し、人間観察したあと、とりあえず図書館に行ったら勉強机にノートPCを置き、書架の前をうろろする日々を過ごしていました。

そんなある日、統計資料館の司書さんに手に入れたデータについて相談した瞬間、やる気スイッチが入ったのです。アメリカには「ライブラリアンのような人」という慣用表現があり、正確さや杓子定規なことを好み、内向的で地味、どちらかといえばモテなさそうなマイナスイメージ⁽¹⁾と結びつけられます。そこにいた、分厚い眼鏡をチェーンでぶら下げた中年の女性司書は、そのイメージにピッタリでした。探している資料について相談すると、目の前の

端末で何やらブツブツ言いながらメモして書庫へ行ったり来たり、今度は満面の笑みで分厚いカタログを広げ、「ほーらあった」と私に差し出してくれました。以来、私はそこに通いつめ、自分の研究テーマをどう論じたいかまで話すと、「それだったら、〇〇省××局が2年に一回、△△というデータを公表しているはず」などと、親身に書籍・統計データの収集を支えてくれたのです。

ネット上に様々な情報が溢れ、図書館まで足を運ばずに、簡単に情報やデータが手に入る昨今でも、その中から正確で適切な情報を粘り強く探し当てなければなりません。私が出会ったライブラリアンは、埋もれたデータの在処を熱心に、楽しみながら見つけてくれるプロ意識溢れる魅力的な方でした。彼女への感謝の気持ちは、学位論文締切前の重くストレスフルな日々の追憶と重なりながら、時折よみがえってきます。



教育復興支援センター
特任准教授

小田 隆史

(1) Wikipedia(英語版)の“Librarians in popular culture”を参照してみてください。小説や映画で、ライブラリアンがどのように描写されているか書かれています。URLはhttp://en.wikipedia.org/wiki/Librarians_in_popular_culture

子ムエの本棚



子ムエの本棚は、児童書に関する話題をお届けするコーナーです。今回は、平成25年度第6回図書館教養講座「絵本の読み聞かせ実践講座」とその関連企画の報告を、講座に参加した初等教育教員養成課程子ども文化コースの1年生のみなさんにお願いしました。附属特別支援学校の図書室や「まつお文庫」も紹介します。

読み聞かせにチャレンジ!!

読み聞かせの極意をつかめ!?

「絵本の読み聞かせ実践講座」

その1

平成25年11月27日(水)の午後、附属図書館では、第6回図書館教養講座として「絵本の読み聞かせ実践講座」を多目的閲覧室で開催しました。講師としてお招きしたのは、仙台市青葉区北山で「絵本と木のおもちゃ 横田や」を経営しながら、被災地の子どもたちを絵本を通じて支援する「こどもとあゆむネットワーク」の代表も務められている横田重俊さんです。「読み聞かせとは何か」という問いからはじめて、「絵本の特徴」、「絵本の読み聞かせのコツ」など、学校教育にも活用できる有益なお話をいただきました。参加者は学生を中心に約30名、お話の概要は以下の通りです。

(報告:子ども文化コース1年・伊東修平、景澤木祐、金澤祥花、川村愛、木村光沙、佐藤智香、鈴木南美、高橋舞優、田中絢子、橋詰玄生)

講師



横田 重俊氏

「絵本と木のおもちゃ横田や」店主

1 「読み聞かせ」という用語について

横田さんのお話は、まず「読み聞かせ」という言葉についての説明から始まりました。

絵本の「読み聞かせ」は、幼稚園や小学校のときからずっと触れてきた、馴染み深いものです。絵本を集団で共有する方法として、「読み聞かせ」という手法が用いられ始めたのは、およそ40年前のことです。個人の関係で読む「絵本」を集団で楽しむための手段として「日本子どもの本研究会」が考え、その手法に「読み聞かせ」という言葉をつけたそうです。「読み聞かせ」の言葉や歴史は、どうやら私たちが思っているよりも案外あたらしいようです。

2 絵本と読み聞かせ、絵本と紙芝居

「絵本」が生まれる以前、子どもたちにお話は「語り」によって伝えられていました。「絵本」でお話が伝えられるようになったなか、子どもの集団に絵を見せながらお話をする活動が生まれ、これが「読み聞かせ」



の原点です。ここで使われていたのが絵本と紙芝居でしたが、絵本は個の関係の中で楽しむときにいちばん魅力が生きるつくりになっているので、絵本は「読み聞かせ」には不向きであるという批判もあります。絵本作家の五味太郎さん

は、絵本は個人で楽しむもので、多人数で共感して楽しむものではないし、絵本との距離が遠いと、絵本の絵が持つ力が発揮できないなどの理由で、集団に対しての絵本の「読み聞かせ」は「嫌いだ」と言っているそうです。

そうした背景をふまえ、多くの絵本にふれる機会が増えるという「読み聞かせ」のよい点を生かすため、大型絵本が生まれました。一人の読み手が多数の子どもに読み聞かせるという状況を考慮して、大型絵本は紙芝居に似たつくりになっています。例えば、地の文が少ない、絵が中心になっているなどです。

3 子どもの発達段階と絵本

今回、横田さんのお話の中で、『ねえ、どれがいい?』という絵本を紹介していただきました。この絵本は、究極と思われる選択肢から一つ選ぶというお話ですが、これが私たちからしても本当に難しい選択なのです。例えば、「ねえ、どれがいい?へびにまかれるのと、魚に飲まれるのと、ワニに食べられるのと、サイにつぶされるのとさ。」といったものです。横田さんは、この本に関するエピソードを教えてくださいました。以前、この本を読み聞かせていたとき、聞き手の小学三年生の女の子が突然、「なんでこんなひどい質問をするの!?!」と本気で怒ってしまったという話でした。このエピソードから分かるように、子どもたちは物語の世界に入り込んで、疑



ジョン・バーニンガム 作、まつかわまゆみ 訳、評論社、2010年

似体験、すなわち「物語の中でのあそび」を行っている、ということでした。だいたい小学四年生くらいまでの、柔らかな感受性を持った子どもたちなら物語やファンタジーの世界を何度でも楽しめるそうです。これは、サンタクロースの存在を信じているかどうか、ということにもいえるようです。人は、年齢が上がるにつれ知識や現実的な経験が増えるために、サンタクロースというのは仮想世界の存在であると気づいてしまうのでしょう。

子どもが耳で聞く話というのは、はじめから映像として動いているテレビとは異なり、自らの頭で想像することで、より物語の世界観に入り込んで情景を焼きつけることができるようです。絵本に入り込む度合いは発達段階に応じており、主観的なのめりこみ方からだんだんと客観的な見方へと変化する、ということでした。

4 「読み聞かせ」をしてみよう

横田さんは、実際に「読み聞かせ」をする上でのアドバイスもしてくださいました。その要点を右の【図1】に絵で表しましたので、ご覧ください。

横田さんのアドバイスは、すぐに実践に生かせる内容でした。今回の教養講座の時間は、自分が読み聞かせをしてもらっているようで、絵本の世界に夢中になりました。

【図1】



その2 お話を楽しもう!! 「絵本の読み聞かせ実践」



11月27日に横田さんによる読み聞かせの手解きを受けた私たち子ども文化コース1年生10人は、12月4日に本学附属小学校の5年2組で「絵本の読み聞かせの実践授業」を行いました。単に絵本の読み聞かせをするだけでは

なく、手遊びや絵本のお話を正しい順番に並べ替えるゲームなども実施し、子どもたちがより楽しく物語と触れ合えるよう工夫しました。また、静と動を交互に組み合わせた活動により、子どもたちの集中を途切れさせないように気をつけました。タイムスケジュールは右の【図2】に示した通りです。

始業とともに授業を開始し、スムーズに1冊目の絵本の読み聞かせへ流れをつくることができました。1冊目の絵本は、子どもたちの興味を引き付けるために、思わず笑ってしまうようなユーモラスな絵本『たかこ』を選びました。

子どもたちが1冊目の読み聞かせをとて集中して聞いてくれたので、一旦体をほぐしてもらえよう、ここで手遊び(手や指を用いてする遊び)を挟みました。横田さんのアドバイスに基づき、高学年でも楽しめる少し難易度が高い手遊びにしたところ、かえって子どもたちのやる気を引き出したようで、失敗した子からも笑顔を引き出せました。

2冊目の読み聞かせは、1冊目よりもストーリー性があり聞く力を要する絵本『ラウラとふしぎなたまご』にしました。読み聞かせが終わったあと、ストーリーについて子どもたちなりの解釈や疑問を語り合う声が教室各所から聞かれました。

次に、グループに分かれて、これから読む絵本の各場面が描かれたカードを正しいと思う順番に並べ替えるゲームを行いました。接続詞や前後の繋がりに注目し、各グループが真剣に話し合いをしていたようです。最後に答え合わせを兼ねて、3冊目の絵本『にんげんごっこ』を私たち全員で配役を決めて読みました。1、2冊目とは異なった形式での読み聞かせを行ったことで、子どもたちがより物語に入り込めるよう工夫しました。

今回私たちは、横田さんにアドバイスいただいたことを基に、実践授業を展開しました。子どもたちが楽しんでいる様子が見られた反面、席が後ろの子どもたちから「絵本が見えにくい」という意見が出るなど反省点も多々ありました。今後も絵本、物語の魅力を追究しつつ教育現場でそれらを生かしていけるよう邁進していきたいと思えます。

最後になりましたが、読み聞かせについてご教授くださいました横田さん、実践をご許可くださいました附属小学校の先生方、授業時間をご提供くださった堀之内優樹先生に心より感謝申し上げます。

【図2】 附属小学校での読み聞かせ実習タイムスケジュール

13:30	挨拶、自己紹介、今日のめあて (想像力をふくらませてお話を楽しもう!)
13:34	絵本の読み聞かせ 『たかこ』清水真裕 文、青山友美 絵、童心社、2011年 読み手:高橋
13:39	手遊び歌 担当:木村
13:42	絵本の読み聞かせ 『ラウラとふしぎなたまご』 ビネッテ・シュレーダー 文・絵、岩波書店、2000年 読み手:川村
13:48	お話の順序を考えよう(児童の活動) 『にんげんごっこ』木村裕一 作、長新太 絵、講談社、1997年
13:49	チーム割り、移動
13:50	説明
13:57	グループごとに活動
14:05	絵本の読み聞かせ 『にんげんごっこ』(同上) 読み手:全員
14:09	手遊び歌 担当:木村
14:15	まとめ、挨拶
余った時間で児童に感想を述べてもらう	



見学レポート

大学と同じキャンパス内に
ありながら訪れる機会がなかった
附属特別支援学校の図書室。
その「いま」を
見学・取材してきました!

附属特別支援学校図書室

子ども文化コース1年: 佐藤智香・高橋舞優・鈴木南美

附属特別支援学校は、小学部、中学部、高等部から成り、約60名の児童・生徒が通っています。今回は本学子ども文化コースの1年生3名にレポートしてもらいました。

本学の附属特別支援学校の図書室

現在多くの特別支援学校では、児童・生徒が本に興味を示しているにもかかわらず、図書室の蔵書の数が少ないという問題を抱えているそうです。

本学の附属特別支援学校でも、校舎建設当初は専用の図書室が造られていませんでした。そこで、10数年前にカウンセリングに使用していた部屋に本を置き、図書室として機能するようにしました。当時は本を買うための予算がなく、やりくりして本を買っていたそうです。現在、予算はついていますが、残念ながら十分な額を確保できていない状態です。それでも、ここ10年間で、高さ2.5mほどの本棚5つ分の本が置かれるようになりました。しかし、小・中・高等部あわせてこの数のため、蔵書の数も質もまだまだ改善の余地があるというお話でした。

特別な支援を要する児童・生徒にとって、本はコミュニケーションの媒体の役割も果たしています。特別支援学校の中では、1冊の本を共有することで障がいや学年を越えた交流の場が生まれています。特別支援学校の図書室の整備は、児童・生徒、そして先生方からも待ち望まれています。

実際に宮城教育大学附属特別支援学校の図書室を見学して

附属特別支援学校の図書室の部屋の広さは8畳ほどです。正面に大きな窓があり、柔らかな陽が差し込みます。窓と入口があるため書棚が設置できる広い壁は2面で、その2面が可能な限り活用されていました。書架の本は、基本的には教科やジャンルで分類されていて、そのほか本学の見上学長寄贈による「学長文庫コーナー」にアニメ絵本などが配架されているのが印象的でした。あとで教務主任の佐藤功一先生からお話を伺いましたが、特別支援学校の図書室では、カラフルな図鑑や絵本など、視覚に訴えるものが児童・生徒にとって親しみやすいそうです。しかし、図鑑などはまだ種



類も冊数も足りないとのことでした。

図書室は、普段は高等部や中等部の授業で調べ学習に利用したり、休み時間に開放したりしているそうです。本はクラスに貸出するのはもちろんのこと、個人にも貸し出しています。その際、返却期限はあまり厳しく設けないそうです。児童・生徒は気に入った本を繰り返し読む傾向が強いため、本の消耗は早く、毎年廃棄する本と新たに購入する本の冊数が拮抗しています。そのため、現在の予算の範囲内では蔵書を増やすことは難しくなっているとのことでした。

子どもたちが手に取る本について

今回、お昼前後に見学に伺いましたが、お昼休みになると、給食の片づけを終えた生徒たちが図書室にやってきました。



1人、2人……と

増えていき、最終的には6~7人くらいがそれぞれ本を楽しんでいました。利用し慣れている生徒のようで、迷いなく気に入った本を手にする姿が見られました。図書室をご案内くださった佐藤先生のお話の中にも、「レギュラー」という言葉が出てきたように、休み時間の利用者はおおよそ決まっているようでした。



『ミッケ!』いつまでもあそべるかくれんぼ絵本
ジーン・マルソー・ロ文、
ウォルター・ウィック 写真、
糸井重里 訳、小学館、1992

ある生徒は、「ご当地グルメ」というようなグルメ雑誌を無心に見ていました。またある生徒は、50音のボタンのついた音の出る仕掛け絵本を飽きずに楽しんでいました。同じく音の出るものとしては、動物の鳴き声が出る図鑑もあり、これを楽しんでいる生徒もいました。『ミッケ!』や『どこ?』というさがし絵を目を皿にして見ている生徒も2~3人いました。多くの生徒が、絵や写真が多いものを好んで手に取っていたように思います。視覚的、聴覚的に訴えるものが好まれているようです。佐藤先生も、今の購入待ち希望リストの中には、「とび出す絵本」など様々な仕掛け絵本や、図鑑などといったものが多く挙げられているとおっしゃっていました。

最後になりましたが、今回見学をご許可くださいました附属特別支援学校の先生方、図書室にご案内くださり、詳しく説明もしてくださいました教務主任の佐藤先生に心から感謝申し上げます。大変勉強になりました。ありがとうございました。



まつお文庫訪問記

大学院教育学研究科 教科教育専攻国語教育専修 1年 重松 彩希

みなさんは「家庭文庫」を利用されたことがありますか？

「まつお文庫」は仙台市若林区中倉に昭和52年からある家庭文庫です。活動の様子を取材してもらいました。

1月25日、松尾福子さんが開いている「まつお文庫」を見学させていただきました。松尾さんが文庫を開こうと思ったきっかけは『子どもの図書館』（石井桃子著・岩波書店）という本との出会いにあるそうです。当時の仕事を辞めようと考えていたとき、この本を思い出し、子どもが素敵な本と出会う手助けをしたいと思い、決意したそうです。今では、子どもから大人まで多くの方が利用してくれているとおっしゃっていました。最近では、一緒に来るお父さんも増えているそうです。

松尾さんのお話を聞いているとき、早く続きが読みたくて走って文庫に入って来た子がいました。その子は「毎週楽しみにしているの!」と笑顔で話してくれました。この文庫で本の楽しさに出会えたのだと思います。

文庫では本の貸し出しの他にも、おはなし会や工作、昔のあそび（あやとり・お手玉・こま・けん玉）など様々な活動が行われています。この日は、あやとり検定が行われており、昇級を目指して子どもたちが、そしてお母さんたちが夢中になっていました。松尾さんは「最近の子どもたちは、塾や習い事で忙しい」とおっしゃっていました。昔のあそびを体験する機会も時間も減っている中、熱心にあやとりをしている子どもたちの姿に、心が温まりました。私も子どもたちにたくさんの技を教えてもらいました。

松尾さんが『子どもの図書館』という本との出会いをきっかけに始められた文庫。今では、本との出会い、文化との出会い、そして何より人との出会いを与えてくれる、心温まる空間となっています。文庫には、素敵な出会いがたくさん詰まっています。みなさんも、ぜひ素敵な「出会い」を探しに、足を運んでみてください。



まつお文庫の所在地は下の地図（★印の場所）のとおりです。活動の詳細は <http://blog.goo.ne.jp/matuobunnko/> をご覧ください。松尾さんの取り組みは、先進的・特色のある活動事例として、宮城県生涯学習課ホームページ (<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/syougaku/5.html>) にも取り上げられています。



児童書この一冊!

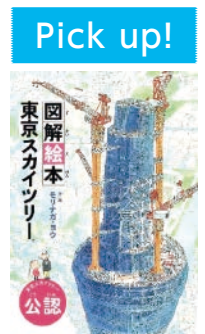
図書館の児童書の中から、新しく入った新刊本やおすすめの一冊を紹介します。

『図解絵本東京スカイツリー』

モリナガ ヨウ 文・絵、ポプラ社、2012年 資料番号J5/ス/1 資料ID 13102163

「東京スカイツリーはどのようにしてできたのか」って疑問に思いませんか？そんな疑問にこの絵本が答えます。地下50メートル高さ634メートルという世界に誇るタワーができるまでを2年間の長期取材の上、紹介しています。

タワーの役割、現場で働く人々、クレーンの秘密、等々、複雑で膨大な作業工程と建設の様子を作者の高密度なイラストと抜群の構図でわかりやすく説明しています。子どもから大人まで楽しめる絵本です。



『からすのおかしやさん』

かこさとし 文・絵、偕成社、2013年 資料番号J91/カ/19-11 資料ID 13102013

ロングセラー『からすのパンやさん』の40年ぶりの続編、長男チョコくんのお話です。

「いずみもり」の「からすのパンやさん」の小さかった4羽の子どもたちは「わかもの」と「むすめ」になりました。ある日とうさんたちが出かけ、4羽はパンやさんを任せられます。おおはりきりのチョコくん、お菓子を作り始めますが・・・!

みんなが大好きなお菓子がたくさん!! 幸せな気分になる一冊で、読み聞かせには最適です。



ふり返ってみませんか、 「修身科」の歴史を！

学校教育講座 笠間 賢二

歴史を学びはじめたころ、「修身科」と聞いて連想したことは、戦前期の小学校教育に保守の岩盤のごとくに君臨し、政治的思惑に拘束された国定教科書のもとで、忠孝一本という時代錯誤的な道德内容を、子どもたちの内発性と切り結ぶこともなく注入する教科、そんな硬直したイメージでした。しかし、そうした「現在の高み」から過去を裁断するような歴史認識が、現在を冷徹に見通して未来を構想する糧になるものでないことは、その後、判るようになります。修身科の歴史の全過程がそうであったわけではなく可能性に満ちた前史があったこと、国定制度は20世紀に入ってからの40年間余に過ぎなかったこと、国定教科書内容にも変遷があり教材の教育的工夫もなされていたこと、等々です。紋切型の歴史理解ではつい見落としとしてまいがちです。

教科(目)としての修身科は、啓蒙への反動という大きな歴史的文脈のなかで、1879(明治12)年に登場し、幾多の変遷を経て1947(昭和22)年に廃止されるまで、60年余に亘って学校教育に存続し続けました。その過程はもちろん一様ではありません。前史となる「学制」期には、「修身口授」という学科が小学校低学年に置かれ、児童用教科書を用いることなく、教師による「口授」という形態で授業を行うとされていました。

修身教科書の性格を決定づけたのは、教育の源を「国体ノ精華」に求めた「教育勅語」(1890(明治23)年)でした。これへの準拠が教科書検定基準とされることで、内容的規制が強化され、同時に児童用教科書も作成されることになりました。ここに、道德内容を教科書によって教え込むという授業形態が成立し、教科書国定制度(1904(明治37)年実施)以降も長く継承されることになります。ただし、教科

書内容が一様だったわけではありません。改訂の時期によって5期に画期されますが、第一期(1904年～)と第二期(1911(明治44)年～)以降とは、徳目構成のベースとなる考え方がやや違っています。第一期では近代的市民倫理を下敷きとした徳目構成がなされたのに対して、第二期では家族主義と国家主義との結合(国民道德)を軸に徳目が再編され、それが、以後の国定教科書の内容構成の基本となっていきました。それを基調としながらも、第三期(1918(大正7)年～)では、時代思潮を反映して、公民教材や平和と国際協調を扱った教材が登場し、第四期(1933(昭和8)年～)以降では、児童の心情や生活を重視した教材配列の工夫がみられ、教科書を児童が愛好する読物とすることが編集の目的とされました。第五期(1941(昭和16)年～)は「聖戦」遂行という国家目的を大前提とした戦時下の教科書でした。

修身科は、戦後、連合軍司令部の指令によって授業停止が命じられ(1945(昭和20)年)、1947年に廃止されます。しかし、その過程で、自立的で十分な総括がなされたとはい切れないのは、今日からみれば、むしろ「不幸」だったといえるのかも知れません。最近、またぞろ「道德の教科化」が叫ばれています。その功罪を見通すための方法のひとつは、間違いなく歴史に学ぶことでしょう。ホットな話題をクールに議論するために、改めて、その歴史を辿ってみませんか。

【参考文献】

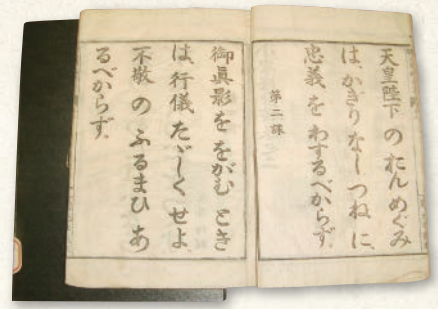
海後宗臣・仲新編
『日本教科書大系 近代編』 第1巻～第3巻
1964年、講談社



1 『小学修身書初等科之部』

文部省編輯局：明治16(1883)年

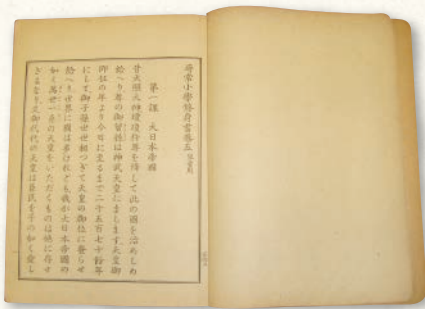
教科書統制を開始した文部省が修身教科書の標準を示す意図で編集したもの。初等科之部・全6巻のうちの1巻。古語や古典和歌などから修身の基礎となる句や文を集録し、それに解説を付す形式をとっている。



2 『校訂尋常小学修身書 卷三』

東久世通禧^{ひがしくげ みちとしみ}：明治27(1894)年

教科書検定期の修身教科書。全4巻のうちの1巻で第3学年用(巻三)である。文部省が定めた修身科の基本方針にもとづいて、教育勅語(1890年)に示された徳目(道德の細目)を基礎として著作された教科書である。「忠孝」、なかでも「忠」が強調されている。



3 『尋常小学修身書 卷五』

文部省著作：大正2(1913)年

国定修身教科書(第二期)の修正版(部分修正を加えたもの)で、第5学年用(巻五)である。第二期国定教科書は、市民倫理を下敷きとした第一期国定教科書への批判にもとづいて、編纂された。家族主義と国家主義との結合(国民道德)を軸に徳目が再編され、これ以後の国定修身教科書の内容構成の基本が形成されることになった。[写真の見開きは「第一課 大日本帝国」の部分]



4 『尋常小学修身書 卷三』

文部省著作：大正8(1919)年

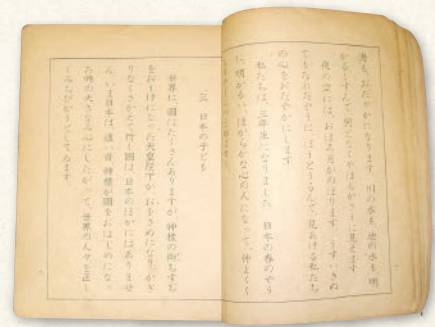
国定修身教科書(第三期)で、第3学年用(巻三)である。大正期という時代思潮を反映して、公民教材の充実や平和や国際協力を扱った教材もあり、児童の発達段階への考慮という工夫もみられる。しかし、第二期国定教科書の国民道德の基調を受け継いでいる。[写真の見開きは「もくろく」の頁]。



5 『尋常小学修身書 卷五』

文部省著作：昭和10(1935)年

国定修身教科書(第四期)で、第5学年用(巻五)である。この第四期国定教科書から、表紙が花模様をちらしたうすい青色になり、色刷りの挿絵も用いられるようになった。児童の心情や生活を重視した教材配列の工夫がみられ、教科書を児童が愛好する読物とすること、が編集の目的とされた。しかし、基調としては、「国体明徴」を旗印にした「忠良ナル臣民」を教化育成するという根本方針が貫かれた。[写真の見開きは「第二十七 よい日本人」の部分]



6 『初等科修身 一』

文部省著作：昭和18(1943)年

国定の「国民科修身」の教科書(第五期)で、第3学年用(初等科修身一)である。第四期国定教科書と同様に、教科書を児童自身のものとして意識させる工夫がみられるが、「皇国ノ道義的使命」である「聖戦」遂行という国家目的を大前提として編纂された戦時下の教科書である。[写真の見開きは「三 日本の子ども」の部分]

学生の読書室

私が選ぶ
この一冊



『とんび』

〔重松清 著、角川書店、角川文庫、2011年〕



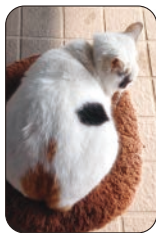
初等教育教員養成課程
理科コース 4年 一條 那津美

私が紹介させていただく1冊は重松清さんが書いた『とんび』です。

この小説は、最愛の妻を息子(アキラ)がまだ幼いうちに不慮の事故で亡くし、男手一つで息子を懸命に育てていく父(ヤス)の物語です。成長していく息子に懸命に向き合い、不器用ながらも立派に育てようとするヤス、様々な葛藤の中で父と衝突しながら優しい青年に成長していく父思いの息子アキラ、そんな二人を温かく見守り、みんなでアキラを大切に育てていこうとする周囲の人々の姿が温かい文体で描かれています。

時には空回りしてしまいますが、ヤスが本当にアキラを愛し、何よりアキラの幸せを一番に考えていること、周囲の人々が息子同然にアキラを愛し、ヤスを支えていく姿には心がじんと温まり、自分も沢山の人の支えられていることを実感します。

親子、家族、友人、同僚、地域の様々な形の愛情と優しさがつまった1冊です。みなさんもぜひ読んで、心をほっこりさせてください!



『小さい“つ”が消えた日』

〔ステファノ・フォン・ロー 著、ルステン・クロケンブリック 絵〕
三修社、2008年



特別支援教育教員養成課程
視覚障害教育コース 3年 庄司 あずさ

ここはひらがなが暮らす五十音村。ある日、村で一番偉い文字は誰かを話し合っ、口論になりました。そんな中一番偉くないのは満場一致で小さな「つ」で決定します。だって、発音することもできないのだから。

この本は、五十音村で起こった事件、本の題であるこの世界から小さな「つ」が消えてしまったことについて描かれています。

さて、小さな「つ」が消えてしまった私たちの世界では、どんなことが起こるでしょう。

この本はとても可愛らしい物語です。しかし物語の裏では、必要のないものなどなく、みんな一人ひとり大切な役割を担っているということ、小さな「つ」を通して語りかけているのだと思います。仲間と少し違うからといって仲間はずれにははいけません。そう、これはいじめ問題をテーマにした本です。いじめ問題に関しては暗く悲しい本が多い中、この本はほっこり暖かくなるとともに、問題についても深く考えさせられるものだと思います。

また、この本の魅力のひとつが、個性豊かなキャラクターです。五十音のひらがなのひとつひとつを、それぞれ様々な個性をもつ五十音村の住人として表現しています。五十音の先頭の「あ」はとっても偉そう、「し」はお金持ち、などそれぞれのひらがなが筆者のこぼれ魅力的に表されています。

かわいい挿絵もあり、物語も章に分かれているので、サクサクと読み進めることができます。皆さんもぜひ読んでみてください。

原稿大募集

「こもれび:宮城教育大学附属図書館ニュース」は皆さんの投稿で成り立っています。特に「学生の読書室」は、学生の皆さんにお薦めの本を紹介してもらうコーナーです。読後の感想や想いをこの場で表現してみましょう。

下記の必要事項を記入の上、Eメールに文書を添付してお送りください。いつでも原稿募集中。ご投稿お待ちしております。

必要
事項

- コース・専攻、学年、お名前、連絡先
- 紹介したい本のタイトルとその著者名、出版社、ISBN
- 紹介文(400字程度)

提出
方法

- 次のメールアドレスあてに提出してください。
toshokan@staff.miyakyo-u.ac.jp

注意
事項

- こもれび次号は7月発行です。 原稿は、こもれび編集委員会で選定の上、掲載します。
- 採用された原稿は図書館ホームページにも掲載されます。



『終末のフール』

[伊坂幸太郎 著, 集英社, 2009年]

初等教育教員養成課程
音楽コース 3年 **水戸 まりな**



私が紹介したいのは、伊坂幸太郎さんの短編集『終末のフール』です。8年後に小惑星が衝突し、地球が滅亡すると予告されてから5年が過ぎたころの人々の様子を描いた作品です。同じマンションの住民たちがそれぞれの人生について考え、あと3年という期限の中でどう生きていくかをテンポよくうつつしだしています。実際にはありえないことに思える話の中に、どこかリアルな日常が描かれていて、読んでいるうちに本当にあと3年で終わるんじゃないか…と思わされます。「あなたの今の生き方は、どれくらい生きるつもりの生き方なんですか？」この言葉は私が本書で一番お気に入り言葉です。こう問われると言葉に詰まってしまいます。明日は毎日、当たり前に来てくれる、と心のどこかで思っている自分にふと気づかされます。それぞれの短編は少しずつ繋がりがあり、終末なのにどこかほのぼのとあたたかい雰囲気の本全体を包んでいます。ちょっと疲れたときに読みたい、そんな一冊です。



『心』

[姜尚中 著, 集英社, 2013年]

大学院教育学研究科
高度教職実践専攻 1年 **齊藤 努**



遊び・勉強・趣味・サークル・アルバイト・恋愛……感受性が豊かで、青春と真ん中の今を生きる学生のみなさんにお勧めしたい一冊を紹介しします。

作者のサイン会の会場に、突然現れた青年の手紙から始まった往復メール。親友の死をきっかけに生きることを真剣に問い、悩む一人の青年と、その問いを真正面から受け止めて真剣に答える作者。「生」「死」「恋愛」「人間」とは何か語られていきます。重いテーマですが、二人が交わす真っ直ぐなメールに惹き込まれ、難しい話はよくわからない私でも、夢中になって最後まで読むことができました。

青年は様々な体験を通して、生も死も、善いことも悪いことも、丸ごと受け入れて生きていこうと決めます。息子さんを亡くしている作者も、この青年との出会いを通して改めて生きることに希望を見出していきます。

青年の「もしかしら自分間違っているのかもしれない、だとしても間違っただらうという疑問を常に抱きながら生きていく」という言葉から、自分自身をニュートラルに見つめ続けることの難しさと大切さを改めて感じました。

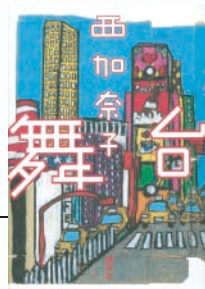
生と死や善と悪、対極であるものは表裏一体となって繋がっています。本を読みながら、私自身も、一昨年の秋に自ら命を絶った友人の死を見つめ、生きることにについて考えさせられた一冊でした。



『舞台』

[西加奈子 著, 講談社, 2014年]

初等教育教員養成課程
国語コース3年 **渡邊 成**



自意識に苛まれて行動できないことが多々ある。スタバのお姉さんの笑顔の下に潜む「こいつセコいな。」が怖くて、フラペチーノのホイップを多めにできなかったり、本屋で太宰の小説を買うときに「にわかが!」という書店員の声が聞こえ、もう一冊今はやりの小説と一緒にレジに持って行ったり。『舞台』の主人公である葉太もそんな自意識過剰な青年である。ただ、彼には亡霊が見える。

二十九歳、初ニューヨーク。葉太は初日に鞆を盗まれる。が、周りの目を気にしすぎて、泥棒を追いかけもしないし、日本大使館へ助けを求めもしない。ほぼお金の無い状態であるのに、尊大な自意識のために行動できない葉太は、やつれ、狂っていく。

圧巻はラストシーンである。気が狂った葉太が、ニューヨークの街を歩き続け着的場所。グラウンド・ゼロ。そこで見た何万の亡霊の目を見て葉太は「生きたい」と願う。葉太の思いは、呆れるほど純粋で美しい。我々のちっぽけな内なる悩みは、社会の大きな出来事に翻弄され、しばしば圧殺される。だが、今悩んでいるのは紛れもない事実であり、私たちにとってそのちっぽけな悩みは何より切実なのである。葉太は『舞台』の主人公であるとともに、私でありあなたである。

